

# 2016 年度 東京大学 前期 国語

## 第一問 評論

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★☆☆	60分	内田樹編、『日本の反知性主義』からの出題。	本文の論理展開はそれほど難しくなく、読解に手間取った受験生は少なかったと思われる。 設問については、難易度の高かった2015年度のものとは違って変わって、非常に易化した印象を受けた。基本がきちんとできている受験生は高得点が取れたと予想され、「東大現代文は点が取れないもの」として対策を怠った受験生にとっては手痛い誤算だったと思われる。(一)、(二)では、難解なロジックや拾いにくい細かい要素などもあまりなく、多くの人が満点近い得点を取ったと思われる、受験生の間でそれほど差がつかなかったと思われる。(三)では、本文に直接書かれていない内容を解答に含める必要があり、限られた制限時間内でどこまで言及すべきか迷った受験生も多かっただろう。(四)は解答を簡潔にまとめるところで、要素の取捨選択で少し迷ったかもしれない。(五)は実際の入試の試験時間内で適切な言葉を選んで解答を書き上げるのは難しかった

傾向と対策
たかもしれないが、解答の方向性は見えやすく、部分点は取りやすい問題だった。(六)の漢字の問題は前年度に引き続き全部で三問だった。標準的なレベルの漢字が問われており、やはり漢字の問題での失点は避けたい。2016年度の問題に関していえば、(三)のような問題は、普段からきちんと対策をしていたかどうかで大きく差がついたと思われる。本文中に書かれていない内容に言及した解答を書かなければならないような問題では、本文の内容から推測可能としてよい内容はどこまでなのかという判断にある程度慣れている必要があると思われる。さじ加減を普段の学習できちんと身につけておくべきだろう。

### 解答

- (一) 未知のものに対する他者の言説を黙って聴き、それに納得したかの判断を、自分の知的枠組みを刷新しながら、その言説がその時点で理に適うかの判断に代替できる人。(76字)
- (二) 自説を基礎づける豊富な知識を保有する反知性主義者は、自説についての他者による是非の判断を考慮せず、あらかじめ自説の真理性を絶対的なものだと考えているということ。(80字)
- (三) 思考や理非の判断などの知的活動の根幹となる自らの存在の意義自体を、反知性主義者に否定されているのと同義であるということ。(60字)
- (四) 集団として情報を探り入れるところから合意形成に至るまでの過程を活性化させ、思いもよらなかったことに駆り立てるといふかたちでの影響を、周囲の他者に及ぼす力。(77字)

(五) 自分の知的枠組みを刷新する人を知性的、その逆を反知性的とする定義に、知性が集団的のみ発動することから、ある人が集団にいることでその集団全体の知的パフォーマンスが向上すれば前者、低下すれば後者とする筆者の人物評価が、常に妥当したということ。(120字)

(六) a 陳腐 b 怠惰 c 頻繁

### 本文解説

### 段落解説

#### I 知性の定義(第1〜第3段落)

ホーフスタッターによると、反知性主義は「思想に対して無条件の敵意をいだく人びとによって創作されたもの」ではなく、反知性主義者は「通常、思想に深くかかわっている」。また、反知性主義は「ひたむきな知的情熱」によって動かされており、「こういった事柄は日本における反知性主義を考えるうえででも考慮する必要がある。

ロラン・バルトによると、無知は「知識の欠如ではなく、知識に飽和されているせいで未知のものを受け容れることができなくなった状態」のことである。筆者は、未知の事柄に出会ったときに、それが自分にとって未知であることを認め、他人の言葉を受け入れ、自分の内的な感覚をもとに、暫定的に物事を判断する人を「知性的な人」だとみなすという。そういった人は、内的な感覚を使うことで「さしあたり理非の判断に代えて」いるわけである。筆者は、知性とは「単に新たな知識や情報を加算しているのではなく、自分の知的な枠組みそのものをそのつど作り替え」という「知の自己刷新」のことであると改めて主張する。

#### II 反知性主義者の振る舞い(第4段落)

一方、反知性主義者はしばしば恐ろしいほどに物知りであるため、「自説を基礎づけるデータやエビデンスや統計数値をいくらでも取り出すことができる」が、それを聴いたところで「私たちの気持ちはあまり晴れることがないし、解放感を覚えることもない」と筆者はいう。反知性主義者は、自分の考えの真理性は絶対であるとし、他人の意見がその真理性に影響を及ぼすことはないという態度を取る。(本文の内容を少し補足すると、自分の保有する知識を根拠に自分の考えの妥当性を主張するというのは実はそれほど意味のあることではない。「自分の保有する知識に基づいて自分の考えを構築する」ところまではいい。だが、「自分はこういう知識を持っていてこういう考えを導き出しており、それゆえこの考えは正しい」といつてしまうのは、そもそもの出発点である。「自分の保有する知識」の「正しさ」を無条件に保証してしまっている点で大いに問題がある。つまり、証明が済んでいない仮説にもとづいて結論を導いても、その結論は正しいとは限らないということである。)反知性主義者は「あなたが何を考えようと、それによって私の主張することの真理性には何の影響も及ぼさない」と宣言する。この言葉は、「考える」ことの意味を否定することになる。これは、「考える」ことを原動力とする知的活動を否定することにつながり、ひいては、一人の知的な人間としての活動、すなわち、生きることそのものを否定することになる。

#### III 集団として発動する知性(第5〜第11段落)

筆者は、「生きる力がだいに衰弱してくる」ような気分させる人を反知性的な人とみなすという。そういった人は「知識も豊かだし、自信たっぷり語るし、反論されても少しも動じ」ることはなく、「自分のことを『知性的』であると思っているかも知れない」が、それでも知性的な人ではない

と筆者は主張する。それは、そういった人が「知性を属人的な資質や能力だ  
 と思っているからである」。筆者は、「知性というのは個人においてではなく、  
 集団として発動するもの」だと考えている。

筆者は、知性とは「集団として情報を採り入れ、その重要度を衡量し、そ  
 の意味するところについて仮説を立て、それにどう対処すべきかについての  
 合意形成を行う」という「力動的プロセス全体を活気づけ、駆動させる力の  
 全体」のことだと主張する。ある人が知性的であるかどうかは、その人個人  
 の知識量や能力だけでは判断できない。その人の存在のおかげで、その人が  
 属する集団全体の知的パフォーマンスが高まった場合に、「事後的にその人  
 は『知性的』な人物だったと判定される」というのだ。

個人的な知的能力が高くても、その人のせいで「集団全体の知的パフォー  
 マンスが下がってしまう」ということが現実には起こっている。筆者は、集  
 団全体の知的パフォーマンスに着目した基準で、知性的・反知性的を判断す  
 る、自らの人物鑑定に対して、絶対的自信をもっていると述べている。

**百字要旨**

知性とは、他人の言説を聞いたときに納得したかをもとに知的枠組みを刷  
 新することであり、それは個人の属性ではなく、周囲の知的パフォーマンス  
 が活発化したことを通して集団的に発動したことが事後的に確認される。

(100 字)

**用語解説**

― 出典：『広辞苑 第六版』(岩波書店)

**陳腐** 古くなってくさること。

ふるくさいこと。ありふれていて平凡なこと。

**駆動** 動力を与えて動かすこと。  
**卓見** すぐれた見識。すぐれた意見。

**飽和** 最大限度まで満たされている状態。ある状態量を増加させる要因を増  
 してもその状態量が一定限度に止まり、それ以上ふえない状態。  
 色の純粋さを表す語。  
 作業に飽きがくること。

**得心** 十分に承知すること。納得すること。

**腑に落ちない** 合点がいかない。納得できない。

**理非** 道理と非理。道理にかなっていることとはずれていること。

**合切袋** こまごました携帯品一切を入れる袋。

**叡智** 深遠な道理をさとりうるすぐれた才知。

**衡量** 重さや嵩をはかること。また、あれこれ勘案すること。

**設問解説**

(一)

**解答** 未知のものに対する他者の言説を黙って聴き、それに納得したかの判  
 断を、自分の知的枠組みを刷新しながら、その言説がその時点で理に  
 適うかの判断に代替できる人。(76 字)

**難易度** ★★☆☆☆

**設問パターン** 要約型十指示語説明型

**解答範囲** I (第1〜第3段落)

**解説**

傍線部中に「そのような」という指示語があるので、まずはこの指示語の  
 指す内容を考えてみると、「他人の言うことをとりあえず黙って聴く。聴い

て『得心がいったか』『腑に落ちたか』『気持ち片づいたか』どうかを自分の内側をみつめて判断する。「このあたりの部分を受けているとわかる。さらに、この前の文を見てみると、『自分はそれについてはよく知らない』と涼しく認める人は『自説に固執する』ということがない。」とあり、これが前提となっていることがわかる。

また、傍線部は、「そのような身体反応を以てさしあたり理非の判断に代えることができる人を私は『知性的な人』だとみなすことにしている。」という一文に含まれているので、ついでに筆者のいう「知性的」が意味するところについても確認しておこう。「そのような人たちは単に新たな知識や情報を加算しているのではなく、自分の知的な枠組みそのものをそのつど作り替えて」おり、「知性とはそういう知の自己刷新のことを言う」のだと筆者は考えていると書かれている。

「ここまで見てきた内容から」そのような身体反応」がどのようなものかをまとめると、「未知の事柄に出会ったとき、その事柄については知らないことを認めたくなくて、自説に固執したりせず、他人の説明を黙って聴いて、満足・納得したか否かを自分の内側をみつめて判断すること」といったものになると思われる。

さらに、傍線部のいう、「こういった身体反応を」さしあたり理非の判断に代えることができる」とはどういうことか考えていこう。この部分は本文中で直接的に換言されているわけではないので、言葉そのものの意味、文脈を考慮して自分で言い換えることにする。

まず、「理非」の辞書的な意味は「道理に合っていることと外れていること、正しいことと間違っていること」といったものであり、「理非の判断」の解釈としては端的に言えば「理に適うかの判断」といったものでよさそうであることがわかる。(ちなみに、「理非の判断」については、第四段落で再

び同じ言い回しが見られるが、ここでは「正解、真理性」を議論する文脈で使われており、筆者固有のニュアンスが含まれているわけではない。)

次に、「さしあたり代えることができる」について考えていく。何と何を「代える」のかについては、「ここまで議論から、「未知の事柄に出会ったとき、その事柄については知らないことを認めたくなくて、自説に固執したりせず、他人の説明を黙って聴いたときの満足や納得」を「理に適っているかの判断」に代替する(代用として用いる)ということになるのだとわかる。「さしあたり」という言葉のもつニュアンスについては、「自分にとっては未知であるが、他人からの説明を聞いて、それについての判断を下す」ということを表現するために、「その時点で理に適っているかの判断に代替する」などとする。

「ここまで非常に取りやすい要素が多く、著しく平易な問題に思えた本問であるが、一つ論点になる要素がある。それは「知的枠組みそのものをそのつど作り替えている」「知の自己刷新」といった要素である。(これらはほぼ同内容であるので、以下「知的枠組みの刷新」とまとめて表記する。)傍線部と非常に近い位置にあり、傍線部が「知性的な人」につながるという点で内容的に関連性があるように思える。結果的に多くの受験生がなんとなく、あるいは傍線部が「知性」について論じるための導入部分であるからとか、理非の判断と同時進行であるからといった風にこじつけて、この要素を入れたと考えられる。いうまでもないが、先に列挙した「こじつけ」はいずれも「知的枠組みの刷新」という要素を解答に入れることについての何ら根拠ともなれない。

傍線部と「知的枠組みの刷新」という箇所はどのような関係にあるのだろうか。知性的な人が理非の判断を下したときの状況を考えてみる。知性的な人は、理非の判断を下したとき、理に適っていれば当然それを受け入れ、自

分の知的枠組みをそのつど作り替えるはずなのである。つまり、「知的枠組みの刷新」は、是非の判断を下すなかで必然的に予定される過程なのだ(ここで「遂行される」などではなく、あえて「予定される」と述べたのは、他者の言説が理に適っていなかった場合には知的枠組みの刷新がなされず、それを考慮すると、知性的な人は常に是非の判断に伴って知的枠組みの刷新をする「準備」がある、その意味で「予定」と表現するのがコンパクトかつ正確だと考えたからである)。逐語的に傍線部の要素を換言していくだけなら、「知的枠組みの刷新」という要素は不要だが、筆者が「是非の判断」というワードに込めた意図を十二分に解答に反映させることを目標とする場合にはこの要素はあったほうがよいといえる。

また、第3段落10文目で、知性とは「知の自己刷新のこと」だと述べられており、それをストレートに踏まえると、「知性的な人」とは、知の自己刷新をする人のこと、のようになるわけで、傍線部を説明する要素として「知的枠組みの刷新」という内容を適切に入れることで、「傍線部のような人＝知性的な人」という等式がスムーズに成立することになるのだ。これは全体に当てはまる特徴でもあるのだが、本文は非常に羅列的な文章で、因果関係が不明確なところがある。ここでも、この等式を成り立たせる理由が明示的には書かれていない。この要素はそれを補完する役割をも果たし、**傍線部に自分の解答を代入したときによりスムーズに理解される**という点でもこの要素を入れる意味はあるといえる。そういった理由から、本解答では「知的枠組みの刷新」という要素を含めた。ただ、この要素を最終的な述部にはならないことには注意が必要である。あくまで「知的枠組みの刷新」は「是非の判断」に付随する要素なのである。そこで、本解答では「知的枠組みを刷新しながら」という形で「是非の判断」の説明箇所に挿入した。

したがって、解答案は、「未知の事柄に出会ったとき、その事柄について

は知らないことを認めたくなくて、自説に固執したりせず、他人の言葉をとりあえず黙って聴いたときに納得したかの判断を、自分の知的枠組みを刷新しながら、理に適っているかの判断に代替できる人。」(113字)というようなものになる。

これでは長過ぎるのもう少し簡潔にまとめていこう。

「未知の事柄に出会ったとき」は、「他人の言葉をとりあえず黙って聴く」という表現と合わせて、「未知のものに対する他者の言説をとりあえず黙って聴き」などとする。

「その事柄については知らないことを認めたくなくて」は、「他人の言葉を聴く」につなげるための補足的な要素と判断し、省略する。

「自説に固執しない」というのは「他人の言葉を黙って聴く」を補足的に説明する要素なので省略することにする。

傍線部では、「身体反応を判断に代える」となっている一方、ここでは「判断を判断に代える」となっている。これについては、この「身体反応」という表現が、とりあえず黙って聞き、心から納得がいったかを判断する、という行動が、他者の言説に出くわした際に、身体反応のごとく自然と瞬時に生じるようなニュアンスを付加することを意図したものにすぎないことを考えれば、「身体反応を判断に代える」となっているところを「判断を判断に代える」と換言したとしてもそれほど問題がないことがわかる。なお、本解答では採用していないが、このようなニュアンスを出した解答も十分に評価されるだろう。

最終的な解答は、「未知のものに対する他者の言説を黙って聴き、それに納得したかの判断を、自分の知的枠組みを刷新しながら、その言説がその時点で理に適うかの判断に代替できる人。」となる。



## 《解答要素》

- ① 「未知のものに対する他者の言説を黙って聴く」
- ② 「(他者の言説) に納得したかの判断」
- ③ 「自分の知的枠組みを刷新しながら」
- ④ 「その言説がその時点で理に適用かの判断」
- ⑤ 「②を④に代替できる人」

※解答は「人」というかたちで締めくくることが必要。

## 《参照箇所》

- ① 第3段落5文目
- ② 第3段落6文目
- ③ 第3段落9文目
- ④ 第3段落7文目 (傍線部)
- ⑤ 第3段落7文目 (傍線部)

## (二)

## 解答

自説を基礎づける豊富な知識を保有する反知性主義者は、自説についての他者による理非の判断を考慮せず、あらかじめ自説の真理性を絶対的なものだと考えているということ。(80字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 具体化型+指示語説明型

解答範囲 II (第4段落)

## 解説

まず、傍線部中の「この人」の指示内容について考えてみると、第4段落2文目で述べられている、「反知性主義者」を指しているということが読み取れる。さらに、そこに続く部分では、反知性主義者たちは膨大な「データ

やエビデンスや統計数値」を知っており、それらは、反知性主義者たちの説を基礎づけるようなものであるということが述べられている。

指示語の指示内容をおさえたところで、傍線部の「あらゆること」について正解をすでに知っている」という部分の内容について考える。文脈を考えればすぐにわかることだが、ここで筆者は、反知性主義者たちがある問題に対する解答としての本当の「正解」を知っていると述べているわけではない。そこで、筆者が「正解を知っている」という比喩的な表現をどういった意味で使っているのか考える。傍線部のうしろを読み進めていくと、「あなたが同意しようとしまいと、私の語ることの真理性はいささかも揺るがない」「あなたが何を考えようと、それによって私の主張することの真理性には何の影響も及ぼさない」といった、他者の思考・判断に対しての反知性主義者の態度について述べられている。「正解」という言葉と「真理性」という言葉の対応を考えてもわかるように、筆者が傍線部でいう「反知性主義者たちが」正解をすでに知っている」というのは、反知性主義者たちが、自説の真理性を絶対的なものだと考えているという内容であるとわかる。さらに、「あなたが同意しようとしまいと」という部分からは、反知性主義者が他者の理非の判断を考慮しようとしまいとすることが読み取れる。

以上の内容をまとめて解答案を作ってみると、「反知性主義者は、自説を根拠づける膨大なデータやエビデンスや統計数値を知っており、自説についての他者の理非の判断を考慮せずに、あらかじめ自説の真理性を確信しているということ。」(86字)といったものになる。

もう少し短くまとめられないか検討してみよう。「反知性主義者は、自説を根拠づける膨大なデータやエビデンスや統計数値を知っており」という部分は、「反知性主義者は(主語) 自説の真理性を確信している(述語)」と

この解答全体の主語と述語の対応関係がわかりやすいように、「自説を根拠づける豊富な知識を保有する反知性主義者」と限定的用法でまとめる。すべでの反知性主義者が自説を基礎づける豊富な知識を有しているかは不明だが、少なくともそのような知識を有しているような反知性主義者について第4段落4文目以降は述べられていると考えるのが妥当であるため、限定的用法で記述しても問題なく、むしろそのような記述は適切といえる。そして、それこそがこの要素が必要な理由である。解答の要素を確定させて、最終的な解答を書く際には、**ある修飾部分が叙述的用法・限定的用法のどちらで記述されるべきかを意識することが重要である。**

最終的な解答は「自説を基礎づける豊富な知識を保有する反知性主義者は、自説についての他者による理非の判断を考慮せず、あらかじめ自説の真理性を絶対的なものだと考えているということ。」となる。

《解答要素》

- ① 「豊富な知識を保有する」
- ② 「①は自説を基礎づける」
- ③ 「反知性主義者は」
- ④ 「他者による自説についての理非の判断を考慮しない」
- ⑤ 「あらかじめ自説の真理性を絶対的なものだと考えている」

※解答は「〜こと。」というかたちで締めくくることが必要。

《参照箇所》

- ① 第4段落2・3文目
- ② 第4段落3文目
- ③ 第4段落2文目
- ④ 第4段落6文目

- ⑤ 第4段落7文目

(三)

**解答** 思考や理非の判断などの知的活動の根幹となる自らの存在の意義自体を、反知性主義者に否定されているのと同義であるということ。(60字)

難易度 ★★★★★

設問パターン 具体化型+理由補填型

解答範囲 II (第4段落)

解説

まず、傍線部を含む一文に目を通すと、『あなたが何を考えようと、何をどう判断しようと、それは理非の判定に関与しない』ということとは、『あなたには生きている理由がない』と言われているに等しいからである。「とあり、前半部分を(A)、後半部分を(B)と仮におくと、「(A)は(B)に等しい」という構造になっていることがわかる。そして、その文の「(B)に等しい」という部分にだけ傍線が引かれ、「どういふことか」と問われている。

まず、(A)にあたる内容について確認すると、「他者の思考や判断を考慮しない態度」とまとめられ、その態度はまさに第4段落で述べられてきた反知性主義者のものであることも読み取れる。

それでは、(B)にあたる『あなたには生きている理由がない』と言われている「とはどういふことだろうか。この部分は「言われている」と客体の目線から述べられているが、(A)の内容を考えてもわかるとおり、「生きている理由」を否定する主体は反知性主義者である。つまり、(B)の内容は「反知性主義者に生きている理由を否定されている(に等しい)」ということ

だと読み取れる。さらに、「生きている理由」とは一体何を指しているのか考えていく。本文中に同内容の表現と思われるものは見つからないため、自分で補って換言しなければならぬ。その点で、非常に書きにくい問題であったといえる。傍線部における「生きている理由」とは、その時点で自らが存在する意義そのものを指しているのだと考えられる。それを踏まえると、(B)の内容は、「反知性主義者に、自らの存在の意義自体を否定されていること」となる。

以上の(A)、(B)の内容から、「他者の思考や判断を考慮しない反知性主義者の態度は、相手の存在の意義自体を否定しているのと同義であるということ。」「というような解答を組み立てた人もいるだろう。だが、ここでも一度傍線部の位置を見直してほしい。冒頭でも確認したとおり、ここでも「(B)に等しい」という部分にだけ傍線が引かれている。すなわち、この設問で説明を求められているのは(B)に関する内容のみであり、(A)の内容は解答に必須の要素とはならないのである。もしも、出題者が(A)の内容についても説明してほしいのならば、傍線部を第4段落12文目全体に設定するはずである。「(B)で、文全体に設定してしまうと傍線部が長くなり過ぎる」という指摘はまったく当たらない。この程度の長さの傍線部は過去に設置された例もあり、また、傍線部を長くすることを避ける合理的理由として想定されるものは、解答欄の長さとの関係であるということを考慮すれば、本問における傍線部の位置で出題者が(A)についても説明を求めているという可能性は限りなくゼロに近いと判断してよいだろう。(傍線部の位置は、解答の方向性を画定させるうえで非常に重要な要素であるから、問題に取り組む際は常に注意を払うことが望ましい)。

本問の要求がいかなるものか明確に画定できたところで、それでは、「(B)に等しい」という部分のより充実した説明を目指していこう。「(B)まででお

さえてきた、「思考や判断を考慮しないことは、存在意義を否定しているに等しい」という内容だが、改めて考えてみると、論理が飛躍している。つまり、思考や判断を考慮しないことと、存在意義を否定することは、その両者の間に何らかの連関がなければ「等しい」といえるものではないのだ。逆にいえば、何らかの連関があるからこそ、思考や判断を考慮しないことが、存在意義を否定しているのと同義であるといえるのである。

そこで、両者の連関を考えると、自らの存在というものは、思考や判断を行うにあたって、なくてはならない、知的活動の根幹となるものであると考えられる。これを踏まえると、傍線部を含む一文の内容は、「思考や判断を考慮しない反知性主義者の態度は、思考や判断などの知的活動の根幹となる、自らの存在の意義自体を否定しているのと同義である」といったものになる。以上から、傍線部の位置と、傍線部が客体であることに注意しつつ解答を組み立てると、「思考や理非の判断などの知的活動の根幹となる自らの存在の意義自体を、反知性主義者に否定されているのと同義である」ということとなる。

#### 《解答要素》

- ① 「自らの存在は知的活動の根幹となる」
  - ② 「反知性主義者に自らの存在意義自体を否定されているのに等しい」
- ※解答は「〜こと。」「というかたちで締めくくると。」

#### 《参照箇所》

- ① 第4段落12文目
- ② 第4段落12文目



## (四)

## 解答

集団として情報を採り入れるところから合意形成に至るまでの過程を活性化させ、思いもよらなかったことに駆り立てるといったかたちでの影響を、周囲の他者に及ぼす力。(77字)

難易度 ★★☆☆

設問パターン 要約型+指示語説明型

解答範囲 Ⅲ(第5～第11段落)

## 解説

まず、傍線部中の「その」という指示語を含む「その力動的プロセス」の意味内容を確認しよう。これに該当するのは、傍線部直前の「人間は集団として情報を採り入れ、その重要度を衡量し、その意味するところについて仮説を立て、それにどう対処すべきかについての合意形成を行う」の部分である。これで、傍線部前半の「その力動的プロセス全体」がどのようなものであるかわかった。次に、これを「活気づけ、駆動させる」とはどういうことを指すのかを以下考えていくことにする。

ここで、傍線部を含む一文全体を見てみよう。「その力動的プロセス全体を活気づけ、駆動させる力の全体を『知性』と呼びたいと私は思うのである。」とある。一方、第9段落末には、「『それまで思いつかなかったことがしたくなる』というかたちでの影響を周囲にいる他者たちに及ぼす力のことを、知性と呼びたいと私は思う。」とある。これら2つの文は、どちらも意味の上で「〜という力を知性と呼びたいと私は思う」となっており、述語部分が共通している。つまり、いずれも筆者が「知性」と呼ぶものについて説明した箇所なのである。これらがこの近距離にあり、かつ接続詞を一切含まずして、まったく関連性のない内容のものを書き連ねるとは考えられない。そこで、これらの関係を精査してみると、まず「『それまで思いつかなかったこ

とがしたくなる』というかたちでの影響を周囲にいる他者たちに及ぼす」ということは、他者をそれまで思いつかなかったことをしようと駆り立てることであり、これは傍線部の「駆動」というワードとかなり近いという直感がある。そこで、力動的プロセスとこの他者を駆り立てるといった要素の関係性を考えてみる。駆り立てるといった現象はどういった状況で発生しているかといえ、第9段落1文目にあるように「ある人の話を聴いているうちに」である。これは先ほど確認した、人間が集団として情報を採り入れ、合意形成を行うに至る力動的プロセスが非常にスケールが大きく普遍的・抽象的であるのに対して、かなりスケールが小さく、卑近で、具体的な話である。同文末に「それは知性が活性化したことの具体的な徴候である」(第9段落1文目)と書かれているように、知性が活性化したとき、具体的には「他者が駆り立てられる」という現象が表出するということなのだ。これをわかりやすく言い換えれば、知性が活性化するというのは、具体的なレベル・側面においては「他者が駆り立てられる」ということなのだ、ということになる。すなわち、「活気づけ、駆動させる」ということと「他者が駆り立てられる」ということはほぼイコールと捉えてよいのだ。筆者が「活気づける」と「駆動させる」とに何らかの違う意味を込めたのか、だとするとどのような意味なのかはこの本文から正確に読み取ることがほぼ不可能であると言わざるをえないが、「駆動」と「駆り立てる」という内容に近いニュアンスを感じたことから、本解答ではおもに「駆動」の換言として「駆り立てる」を配置している。

したがって、解答は「集団として情報を採り入れ、その重要度を衡量し、その意味するところについて仮説を立て、それにどう対処すべきかについての合意を形成するに至るまでの過程を活性化させ、思いもよらなかったことに駆り立てるといったかたちでの影響を、周囲の他者に及ぼす力。」というよ

うなものになる。

より簡潔な解答を考えていこう。「集団として情報を採り入れ、その重要度を衡量し、その意味するところについて仮説を立て、それにどう対処すべきかについての合意を形成するに至るまでの過程」は、「集団として情報を採り入れるところから合意形成に至るまでの過程」と言い換えていいだろう。重要なのは、合意形成に至るまでの過程での活動全体であるから、ここでは「過程」のなかの段階一つひとつを列挙しなくてもよいとみなす。ここで字数を割くのはあまり得策ではないだろう。本解答では「情報を採り入れてから合意形成に至るまで」という出発点…インプットと終着点…アウトプットをおさえることに留めた。

よって、最終的に、「集団として情報を採り入れるところから合意形成に至るまでの過程を活性化させ、思いもよらなかったことに駆り立てるといふかたちでの影響を、周囲の他者に及ぼす力。」という解答ができ上がる。

#### 《解答要素》

- ① 「集団として情報を採り入れるところから合意形成に至るまでの過程」
- ② 「(①を) 活性化させる」
- ③ 「思いもよらなかったことに駆り立てるといふかたちでの影響を周囲の他者に及ぼす」

※解答は「く」という「力」のこと。「と」いうかたちで締めくくると。

#### 《参照箇所》

- ① 第8段落2文目
- ② 第8段落3文目 (傍線部)
- ③ 第9段落3文目

(五)

**解答** 自分の知的枠組みを刷新する人を知性的、その逆を反知性的とする定義に、知性が集団的にのみ発動することから、ある人が集団にいるこ

とでその集団全体の知的パフォーマンスが向上すれば前者、低下すれば後者とする筆者の人物評価が、常に妥当したということ。(120字)

**難易度** ★★★★★

**設問パターン** 要旨把握型

**解答範囲** 本文全体(特に第3・第10・第11段落)

#### 解説

**設問に「本文全体の論旨を踏まえた上で」という指定があるが、まずは傍**

**線部について「どういふことか」を考えていくのが原則である。**傍線部に「この基準」とあることから、まずは筆者のいう「この基準」にもとづく「人物鑑定」とはいったいどういうものであるか考える。本文をさかのぼっていくと、第10段落2文目に「その人がいることによって、その人の発言やふるまいによって、彼の属する集団全体の知的パフォーマンスが、彼がいない場合よりも高まった場合に、事後的にその人は『知性的』な人物だったと判定される。」とあり、第11段落3文目には「その人が活発にご本人の『知力』を発動しているせいで、彼の所属する集団全体の知的パフォーマンスが下がってしまうという場合、私はそういう人を『反知性的』とみなすことにしている。」とある。ここから、ざっくりまとめると、**筆者による人物鑑定は、集団の知的パフォーマンスを向上させれば知性的な人であり、集団の知的パフォーマンスを下げれば反知性的な人であるとするものである**ということになる。また、第10段落をもう一度読み直すと、「知性は個人の属性ではなく、集団的にしか発動しない。だから、くその人がいることによって、彼の属する集団全体の知的パフォーマンスがく」とあることから、**知性が集団的に発**

動するものであるがゆえに、筆者の人物評価の基準が集団の知的パフォーマンスに注目したものとなっていることもおさえておく。

ここで、本文全体の趣旨を踏まえるといふ付帯条件を満たすべく、本文全体を概観すると、第3段落で筆者は「知性」とは、未知のものに遭遇したときに「自分の知的な枠組みそのものをそのつど作り替え」る、「知の自己刷新」であると定義している。そして、第3段落最終文で「個人的な定義だが、しばらくこの仮説に基づいて話を進めたい」と述べているように、筆者は何よりもまず、この定義から出発して議論を組み立てているのである。この定義から直ちに導かれる(その論理的ギャップは限りなくゼロに等しい)のが、「知性的な人」「反知性主義者(＝反知性的な人)」である。もはやこれらはひとまとまりの定義と捉えても問題がない。実際、第3段落最終文の「定義」の意味が「知性的な人」までをも包括している可能性も否定できない。続く第4・第5段落では反知性主義者たちの特徴を述べ、第6段落からは、先ほどふれた、知性が集団的なものだという主張がなされている。

そこで、以上のように本文全体の論旨を踏まえると、傍線部の「人物鑑定を過ったことはない」という部分は、先ほど説明した、集団の知的パフォーマンスの向上・低下を指標とした、筆者の人物鑑定によって判定された「知性的な人」・「反知性的な人」が、第3(・第4)段落で述べられていた「知性的な人」「反知性的な人」の定義に常に当てはまってきたということを示しているのだとわかる。

以上から、解答案は「未知のものに出会ったとき、自らの知的枠組みを刷新する人を知性的な人、他者の理非の判断を考慮せず、自説の真理性を確信する人を反知性的な人とみなす定義に、知性が集団的のみに発動することから、集団の知的パフォーマンスを向上させれば前者、低下させれば後者とする筆者の人物評価が、常に当てはまってきたということ。」(151字)となる。

設問の指定に「100字以上120字以内」とあるので、その字数に収まるように推敲していこう。

まず、「未知のものに出会ったとき」という部分は、あくまで大事なのは知性的な人が知的枠組みの刷新を行えるということであり、この要素はあまり重要ではないため削除する。

「自らの知的枠組みを刷新する人を知性的な人、他者の理非の判断を考慮せず、自説の真理性を確信する人を反知性的な人とみなす定義」という部分は、第4段落冒頭で、第3段落の「知性的な人」の内容を受けて、「『反知性主義』という言葉からはその逆のものを想像すればよい」とあることから、この記述を利用しつつ簡潔に、「自分の知的枠組みを刷新する人を知性的、その逆を反知性的とする定義」とまとめる。「その逆」と大胆にまとめてしまふことに抵抗があるかもしれないが、他人の理非の判断を考慮せず、自説の真理性にこだわる反知性主義者たちは、他者の言説を聞き知的枠組みを刷新することはないといえるから、この記述で必要最低限の内容はカバーしているといえるだろう。

「常に当てはまってきた」という部分は、同じ意味でより字数の少ない「常に妥当してきた」という表現に代える。

したがって、最終的な解答は、「自分の知的枠組みを刷新する人を知性的、その逆を反知性的とする定義に、知性が集団的のみに発動することから、ある人が集団にいることでその集団全体の知的パフォーマンスが向上すれば前者、低下すれば後者とする筆者の人物評価が、常に妥当したということ。」となる。

#### 《解答要素》

① (筆者は)自らの知的枠組みを刷新できる人を知性的、そうでない人を

- 反知性的であると定義して(みなして)いる
- ② 知性は集団においてのみ発動するものである
- ③ ゆえ、筆者は集団の知的パフォーマンスが向上したか否かによって、ある人が知性的であるか反知性的であるか判断する
- ④ ③の基準による人物評価が、①の定義に常に妥当した、という構造であること

※解答は「〜こと。」というかたちで締めくくることが。

《参照箇所》

- ① 第3段落9〜11文目、第4段落1文目
- ② 第6段落1・2文目、第10段落1文目、第8段落1文目
- ③ 第10段落1・2・3文目
- ④ 第11段落3文目(傍線部)

(六)

解答 a 陳腐 b 怠惰 c 頻繁

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 知識・教養

解説

aの「陳腐」の「陳」という字については、「陳述」「陳列」といった熟語も覚えておきたい。bの「怠惰」の「惰」は「楕円」の「楕」ではないので注意しよう。cの「頻繁」の「頻」という漢字は、「頻りに」と書いて「しきりに」と読む。また「繁」という漢字は、「足繁く」と書いて「あししげく」と読む。これらは常用外の用法なので書けるようにしておく必要はないが、教養として読めるようにしておこう。

(昆野祐己、丸岡賢人、正木僚)



# 2016 年度 東京大学 前期 国語

## 第二問 古文(作り物語)

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★☆☆	20分	『あきぎり』からの出題。作者は未詳。成立は鎌倉時代で、『源氏物語』などの影響を受けた擬古物語の一つである。特徴としては、季節の移り変わりを描く表現が巧みであることが挙げられる。ちなみに、『あきぎり』はその名の通り、葉が桐に似た秋に咲く花を指している。	東大古文では本文自体は読みやすいことが多いが、どの部分を答えればよいのかがわかりにくい問題も多い。重要なのはしっかりとした解釈にもとづいた十分で簡潔な説明と、古文の知識を確かめるための逐語訳の正確さであり、記述力の差がハッキリと点数に表れるといえるだろう。今回の出題にみられるように、逐語訳や説明、理由説明といった基本的な設問だけでなく、和歌の解釈が問われることもあるので、いろいろな文章に接していくように心掛けたい。 設問に関しては、ほとんど例年通りであり、傍線部の現代語訳と内容説明問題が出題されている。特に、(一)は傍線部が短く単語訳に近い問題である場合が多いので、しっかりと得点できるようにしたい。また、和歌は頻出であり、(三)のよ

### 傾向と対策

うに和歌の解釈が必要とされる問題も少なくないので、古文を勉強する際には、和歌に関する問題にふれる時間をしっかりと設けるようにし、掛詞のように基本的な和歌の技法は、覚えるようにしよう。

### 《この解説の使い方》

#### 本文読解

「本文を読み始める前に」と「通読」からなる。古文の実力のある人が実際に本文を読むとき何を考えているか(「本文を読み始める前に」および「通読」の◎部分)や設問解説では述べられなかった重要なポイントなど(「通読」の★部分)について書いてある。どこに注意して本文を読めばいいかわからない人、本文を読むのに時間を使いすぎる人は、この項目を見てみよう。

#### 設問解説

設問ごとの詳細な解説を、古文が苦手な人にも思考の流れが十分に伝わるように書いてある。古文が苦手な人はまずは「合格答案」レベルの解答を、得意な人は「満点答案」を目指そう。

#### 本文解説

「現代語訳」と「用語解説」からなる。「現代語訳」は基本的に受験生レベルの古文知識で作れる簡単な訳になっている。ほかの項目を読み終えたあとの復習に使おう。

#### 解答

- (一) イ 悲しいとはいっても、そのような言葉では言い表せない  
ウ すぐに姫君をお迎え申し上げよう  
オ 一覽にさえならないので

(二) 尼上の死後も、なんとかして姫君を丁寧に世話し申し上げよということ。

(三) 尼上に先立たれ、火葬の煙の中、姫君はさぞ悲しんでいるだろうということ。

**本文読解**

**本文を読み始める前に**

前書きには登場人物の関係が書かれており、十分目を通す必要がある。また、注の直後に【人物関係図】があるので、こちらもあわせて読んでおきたい。前書きに「宰相」は姫君の「御乳母」であると書かれているが、「乳母」は身分の高い子どもに授乳を行うだけではなく、その子の後見人となる重要人物で、乳母の実子である乳母子は、乳母が育てた子どもに強い忠誠を誓い、兄弟のように側で支える存在である」という知識があれば、さらに人物関係を意識できるだろう。

次に「注」を見るが、「葬送」「喪」といった言葉から、誰かが亡くなるといふ内容が予想される。また、前書きのときと同様、登場人物には注意しておこう。意外と見落としがちなのは、「注」の三つ目「阿弥陀の峰」である。地名は重要でないことのほうが多いが、これには「葬送の地」という特別な意味が込められている。

**通読**

第1段落第1行〜第2行「(尼上ハ)くみ給はむ。」

◎「限り」はいろいろなもの「との」「限界」を表すが、「こ」では「寿命」の

ことだろう。

◎「尼上」は「限り」に近いのであるから、「なからむ」＝「いなくなる」のは「尼上」。

◎「尼上」は自分がいなくなった後の娘(＝姫君)が心配なのだから、「宰相」に世話を頼んでいるのだろう。また、係助詞「か」は、直後にこの発言に対する返事もなく、宰相以外に頼める人がいない、という文脈なので反語でとる。

第1段落第2行〜第4行「我なくなぐめがたし。」

◎「見譲る」は難単語であるが、文脈から「世話を頼む」ことと判断。

★見慣れない単語が出てきた場合は、文脈から判断するのが基本だが、意味を推測するのが難しいことも多い。そんなときは深く考えすぎず、一旦読み飛ばして後で再び考えるようにしよう。

第2段落第1行〜第3行「まして宰相くたげなり。」

★「せきかねる」は何かをこらえきれない様子を指し、多くの場合「涙をこらえられない」と訳す。

◎「ためらふ」は「①気持ちを静める②静養する」。ここでは涙をこらえられずにいる宰相の様子から、前者がふさわしいだろう。

◎「いかで」は疑問か反語か願望。文脈から「こ」では反語。

◎「おのづから」は「①自然と②たまたま」。下に仮定表現を伴うと「もしかすると」の意味になる。「こ」では仮定表現がないので、「①自然と②たまたま」のどちらか。あとは問題を解くときに考える。

◎姫君について宰相が尼上に話しているという文脈から、「世にながらへ」の主語は姫君。

第2段落第3行～第4行「姫君は、まゝえにけり。」

★「ものおぼゆ」は「意識がはつきりしている」の意。打消表現を伴った「ものおぼえず」という形で出てくることもかなり多い。ここでは、今にもこっと切れそうな尼上を前にしてなお意識がはつきりしている(＝動転していない) 自分の状態を姫君が否定的に捉えている。

第3段落第1行～第2行「姫君は、たゞし給ふを、」

★「心も心ならず」は「気が気でない・気が動転する」の意。

第3段落第2行～第3行「何事もしゝえ給はず。」

★「しかるべき」や「さるべき」、そこから派生した「さるべきにやありけむ」などといった表現は頻出だ。

◎「われさきにくし給ふ」が難しい。少しあとに「この君の御ありさま」とあるので、姫君の動作であることはわかるが、「絶え入る」の意味がわからない。設問にかかわらないようなので、気にしすぎない。

★「絶え入る」は「①息絶える②気絶する」を表し、ここでは姫君が「気絶する」の意。余裕のある人だけ覚えよう。

◎「いかがせむ」は直訳すると「どうしようか」だが、ここでは反語だとわかるので、「どうしようもない」「の意。つまり、尼上の死は前世からの因縁であり、避けようがないと言っている。

◎「この」は補助動詞なので「し」続ける「の意。

第4段落「その夜、やゝり給ひぬ。」

★「むなし」は「むなし・はかない」といった訳が一般的だが、「死んでし

まって魂がない」という意味もある。特に「むなしくなる」は「死ぬ」の婉曲表現として頻繁に現れるので覚えておこう。

★「さぞ」は「①そのように②さぞかし③いくら」といつても「と訳す。心情表現には特に「さぞ・さぞかし」の意味で用いられる。余裕のある人はおさえおくとよい。

◎「召す」は尊敬語。「お呼びになる、取り寄せなさる、お召しになる(着るの尊敬語)、お乗りになる、召し上がる」といった意味がある多義語なので、文脈を意識して訳していこう。今回は「お呼びになる」の意。

◎「かまへて」は打消の表現を伴う場合は「決して(く)ない」という訳になり、意志・命令などの表現を伴う場合は「なんとかして」という訳になる。今回は命令の表現があるので後者で訳す。

◎「御忌み離れなば」は注釈から「喪が明けたら」。「な」は完了の助動詞「ぬ」の未然形なので、「ば」は順接の仮定条件「もしくならば」となる。

第5段落第1行～第2行「中将は、かゝもとまで、」

★「心細からで」の「で」は打消の接続助詞。接続助詞は動詞に限らず用言一般に接続することを忘れないようにしよう。

◎「注」より、「中将」は姫君のもとに密かに通っている男性。

◎「鳥辺野の草」は難しいが、設問にかかわらないので読み飛ばす。

第5段落第3行「鳥辺野の夜くしかるらめ」

◎下の句より、中将が姫君を気遣った歌と判断。「夜半の煙」は尼上のことをいうのだろう。

第5段落第4行「とあれども置きたり。」

◎本文読了。解き残した設問に取り組み。

**設問解説**

ここでは、実際の東大合格者が入試本番でどのような思考過程(★ポイント)を経て、どのような解答を書いたかを紹介する《合格答案》と、これに不十分なポイント(◎ポイント)を補った《満点答案》の二段階に分けて解説を行う。《合格答案》は、的外れであったり、逆にかなり《満点答案》に近かったりすることがあるが、これは問題のレベルの差によるものである。合格者と自分とではどこに差があったのか、あるいは、どの程度同じ考え方ができているのかを確認しよう。

(一)

**解答**

**《合格答案》**

- イ 悲しいけれど、死別とは避けられない世の常である。
- ウ すぐにお迎え申し上げよう。
- オ ご覧にさえならないので

**《満点答案》**

- イ 悲しいとはいっても、そのような言葉では言い表せない。
- ウ すぐにお迎え申し上げよう。
- オ ご覧にさえならないので

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 現代語訳

**解説**

イ

◎ポイント

・ 逆接の仮定条件「とも」

この問題で重要なのは、間違いなく「世の常なり」の解釈だろう。たいていの受験生が(合格した人も含めて!)「よくあることだ」といったふうに解釈してしまった熟語。このような解釈で傍線部を訳出すると《合格答案》のような答案になってしまう。「とも」の逆接の部分がうまくハマっていて、一見正しく思ってしまうのがまたいやらしいのだが、この解釈は誤りである。

★ポイント

・ 世の常なり|| 言い表せない・月並みな表現だ

「世の常なり」は「〜といへば世の常なり」の略である。この慣用句は「〜という言葉では言い表せない」の意。

ちなみに今回の「世の常なり」の類義表現に、「〜といへばおろかなり」というものがあるが、こちらはよく単語帳にも載っているので知っている人も多いかと思う。「〜といってしまうのはいい加減だ・並一通りだ」という直訳から「〜という言葉では言い表せない」という訳を連想できるようにすればよいだろう。「世の常なり」と同じように、「〜といへば」の省略が起こるので注意が必要だ。

「世の常なり」から「おろかなり」を連想するのはさすがに厳しいので、今回の解釈は困難であったと思われる。というより、知識がなければ解けない(解釈を誤る)タイプの問題であるので、間違えてしまった人は気に病むことなく、次のときは間違えないようにすれば十分であろう。



ウ

◎ポイント

- ・やがて⇒すぐに・そのまま
- ・意志の助動詞「べし」

副詞「やがて」は「すぐに・そのまま」の意。今回は「すぐに」の訳が適しているだろう。場所を移らないときは「そのまま」、時間的な間隔が短いときは「すぐに」というふうに分けると、それらしい現代語になる。

助動詞「べし」が推量・意志・可能・当然・命令・適当の六つの意味をもつことをおさえるのは必須。今回は台詞中の大殿自らの動作を修飾していることから、一人称主語。一人称主語の「べし」は基本的に意志で解釈する。

オ

◎ポイント

- ・だに⇒さえ

動詞「御覧す」と副助詞「だに」で「御覧じだに」となっている。「だに」は「①〜さえ②せめて〜だけでも」の二通りの訳を想起できればよい。命令・願望・意志を伴う場合は②の訳も検討する必要があるが、今回はそのいずれも伴っていないので、「〜さえ」と訳す。

「御覧じ」の主語は、中將から贈られた和歌を目にする可能性のある、姫君か少將になるが、敬語が使われる方を考えて、姫君となる。「省略を補って」などの条件がない現代語訳問題なので、主語は補っても補わなくてもよい。

(二)

解答

《合格答案》

尼上の死後も、なんとかして姫君を丁重にお世話し申し上げよということ。

《満点答案》

尼上の死後も、なんとかして姫君を丁重にお世話し申し上げよということ。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明(具体化型)

解説

◎ポイント

- ・かまへて⇒なんとかして
- ・もてなす⇒扱う・世話する

文脈から、尼上が死期を悟っていることをおさえて、「なからむあとにも」を尼上の死後と解釈する。直訳すると、「(私が) いないようなあとでも」となる。

「かまへて」は「何とかして」、「もてなす」は「①ふるまう②扱う・世話する③もてはやす」の意(③の意で用いられることはまれなので、これは無理に覚えずともよい)。いずれも重要単語である。今回は尼上の死後の姫君に焦点が当たっているので、「もてなす」は姫君を目的語とする他動詞と考えて、「世話する」と訳そう。

以上をまとめると、傍線部の直訳は「いないようなあとでも、何とかして丁重にお世話し申し上げよ」となる。問題文の指示は「どういふことか、説明せよ」なので、「どういふことか」わかるように主語を補う必要がある。

(三)

解答

《合格答案》

尼上に先立たれ、火葬も終えた今、姫君はさぞ悲しんでいるだろうということ。

《満点答案》

尼上に先立たれ、火葬も終えた今、姫君はさぞ悲しんでいるだろうということ。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 和歌

解説

◎ポイント

- ・ 注の参照
- ・ 立ちおくる⇨死に遅れる
- ・ さこそ⇨さぞかし

「鳥辺野の夜半の煙」の解釈は、本文の「その夜、やがて阿弥陀の峰といふ所にさめ奉る。むなしき煙と立ちのぼり給ひぬ。」という記述と、「阿弥陀の峰」の注釈の内容から判断して、尼上の火葬の際に立ち昇った煙を指すことがわかる。

「立ちおくれ」は「死に遅れる」の意で、あまり見ない単語であるが、「おくる」の意味「先立たれる」を知っていれば、そこから意味を類推できたであろう。

「さこそは君が悲しかるらめ」「は さこそ(さぞかし)」、現在推量の「らむ(今頃〜しているだろう)」「から」「さぞかし君は今頃悲しんでいるだろう」となる。

また、この「君」は、「中将は、かくと聞き給ひて、姫君の御嘆き思ひやり、心苦しくて、鳥辺野の草とも、さこそ思し嘆くらめと、あはれなり。」という描写から、明らかに「姫君」を指している。

以上の内容を字数に配慮しつつまとめる。

本文解説

現代語訳

(尼上は)本当にこれが最期と思われなさいるので、御乳母(⇨宰相)をお呼びになつて、「もはやこれまでと思われると、この姫君のことはかり心配してしまうので、(私が)いなくなったあとでも、なんとかして(姫君を)丁寧に世話し申し上げなさい。今は宰相(⇨あなた)のほかには、(姫君は)誰を頼みになさるうか(いや、あなた以外にはいない)。私がいなくなったとしても、父君が生きていらっしゃったならば、そう(⇨姫君が一人残されと)は言ってもと、安心であるはずですが、誰に姫君のお世話を頼むということもなく(私が)死んでしまったあとの気がかりさ(といつたらない)」「と繰り返しながらも最後まで続けなさいこともできず、御涙もとどめがたい。

まして宰相は涙をこらえることができない様子で、しばらくは何も申し上げない。しだいに気持ちを静めて、「どうして(姫君のお世話が)いい加減なことがあるうか、いやない。(尼上が)いらっしゃるときであれば、たまたま(私も)立ち去ることもあるでしょうが、(これからは私以外の)誰を頼みとして(姫君は)片時もこの世に生きながらえなさいことがおできになりましょうか」と言つて、袖を顔に押し当てて、こらえきれない様子である。姫

君はましてただ同じ状況である中でも(＝同じ悲嘆のさまである中でも)、このような(人々の)嘆きをわずかに聞くにつけても、自分は依然として意識がすっかりしているのかと、悲しさをどうすることもできない。本当に今が臨終だと思いいなくなって、念仏を声高に唱え申し上げなされ、眠りなされたのであるかと見ると、(尼上は)すでに息絶えなされた。

姫君はただ同じように(死んでしまいたい)と、(亡くなった尼上を慕いなさるけれど、どうしようもない。誰しも気は動転しながら、そのままであつてよいことでもない)ので、葬送の準備をなさるにつけても、(姫君は)我先にと気を失いなさるのを、「何事も前世からの因縁がおりになるのでしよう。(尼上が)お亡くなりになられたことはどうしようありません」と言つて、またこの姫君の御有様を皆嘆いていた。大殿もしいに(姫君に)申し上げ慰めなさるけれど、(姫君は)生きている人のようにもお見えにならない。

その夜、そのまま阿弥陀の峰というところに(尼上の遺体を)納め申し上げる。むなし煙となつて(尼上は天に)昇りなされた。悲しいけれども、そのような言葉では言い表せない。大殿は、こまごまものをおっしゃることなど、(御自身も)夢のように思われて、姫君のお気持ちにはさぞかしと推し量られて、乳母をお呼びになつて、「なんとかして(姫君を)お慰め申し上げよ。喪が明けたらすぐにお迎え申し上げよう。心細い思いをしないでいらつしやい」などと頼もしい様子で言い置きなされてお帰りになつた。

中将は、こう(＝尼上が亡くなった)と聞きなされて、姫君のお嘆きを思いやり、気の毒に思い、鳥辺野の草(になつてしまいたい)とも、さぞかし思い嘆いていらつしやることだろうとも、しみじみ胸を痛められる。夜ことの通り路も、今はあつてはならないことであろうかと思いなさる(お気持ちは)、どなたのお嘆きにも劣らないのであつた。少将のもとにまで

鳥辺野の……(鳥辺野の夜中の火葬の煙(＝尼上)に先立たれ、(姫君は)さぞかし悲しいことだろう)

とある(歌を贈つた)けれど、(姫君は)「覽にさえならないので、(少将は)どうしようもなくそのまま放つておいた。

**用語解説**

かぎり【限り】 ①すべて②限度③臨終

かまへて ①なんとかして②(打消を伴つて)決して

もてなす「他サ四」 ①ふるまう②扱う③世話をする

たのむ【頼む】「他マ四」 あてにする

うしろめたさ 気がかりさ

やる【遣る】「他ラ四」「補助ラ四」 ①送る②(打消を伴つて)しきる

せきかぬ「他ナ下二」我慢できない

・堰き止める「の「せき」に「くできない」という意味の接尾辞「かぬ」がついたもの。

けしき【気色】 ①様子②機嫌

ためらふ「他ハ四」「白ハ四」 ①気持ちを静める②ためらう

おろかなり ①いい加減である②並みひとおりだ

おのづから ①自然と②たまたま

なほ ①依然として②やはり

はや 早くも・すでに

かひなし 無駄である

やうやう しだいに・だんだん

やがて そのまま・すぐに

「ころぐるし【心苦し】 ①気の毒だ・気がかりだ②つらい

## 【コラム】人称代名詞を置き換える？ 置き換えない？

傍線部中の人称代名詞の扱いに悩んだ経験はないだろうか。

人称代名詞とは、「わたし」「あなた」「彼」「彼女」といった「人を指す代名詞」のこと。この人称代名詞が傍線部に現れるとき、古文の解答を書くのに慣れていないと、ちょっと困ってしまうことがある。

例えば今回の傍線部A。解答のポイントをおさえ、いざ答案を書こうとした瞬間、こんなことを考えてしまい、書き始めてふと手が止まった人もいるのではないだろうか。

「なからむあと」の主語は何と補えばいいんだろう。「尼上」、それとも「自分」？

古文を解き慣れていないと、似たような経験をすることは結構多いと思う。そして、解答時間に迫られ、最後は「なんとなく」の訳出で済ませてしまう人も、結構多いと思う。そんな人は次の原則を頭に入れておいてほしい。

その一。現代語訳問題の人称主語はそのまま訳す。

その二。内容説明型問題の人称主語は置き換えて訳す。

まず、現代語訳問題。この場合、特に指示がなければ、その言葉を使った人の視点から訳す。人称代名詞は置き換えないのがふつうである。当たり前のことだが、古文の「我」「汝」を現代語訳したところで「光源氏」だの「若紫」だのといった固有名詞は出てこない。「我」は「私」、「汝」は「あなた」。それが現代語訳である。

これに対して、内容説明型問題のときはどうか。今回の(二)のように、「説明せよ」と問われたときには、人称代名詞はそれが指すもともとの人物名に置き換えてあげるのがよい。これはさらなる「説明」の余地を残さないことで、減点を避けるためである。

極端な例で説明する。○○物語の「我汝を想ふ」とはどういうことか「説明せよ」と言われて、A君は「私はあなたを愛している」ということです、B君は「源氏は若紫を愛している」ということです、と答えたとする(源氏物語にこんな頭の悪い台詞はないと思うが)。この場合、「説明」として優れているのはB君の返答だろう。A君には、思わず「それは説明になってない、私って、あなたって誰のこと？」とさらなる説明を求めたくなる。つまり、説明の余地が残っている。これでは、内容「説明」問題の解答として減点を食らっても仕方がないのではないだろうか。

というわけで、さきほどの原則その二に行きつく。初めのうちは不自然に感じるかもしれないが、減点の芽を摘むための努力とあって、心に留めておいてほしい。

(市川裕圭、上岡公聖)



# 2016 年度 東京大学 前期 国語

## 第三問 漢文（宋代の漢詩）

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★★★	20分	<p>蘇軾<small>そしやく</small> 「寓居定惠院之東、雜花滿山、有海棠一株、土人不知貴也（寓居<small>ぐきよ</small>定惠院<small>ぢやうゑいん</small>の東、雜花山<small>ざつくわやま</small>に滿つ、海棠<small>かいだう</small>一株あり、土人<small>どじん</small>は貴<small>たか</small>きを知らざるなり）」からの出題。</p> <p>蘇軾は北宋の政治家・詩人・書家。マルチな才能をもっていた。政治家としては、王安石の新政（かなり斬新な制度改革。王安石が提案・強行した）に反対するなど、政府に齒向かったため、左遷を繰り返すことになる。だがこの期間こそが蘇軾に詩作の時間を与えたともいえる。</p> <p>定惠院は、息子の邁とともにほかの家族を待ったための仮住まいだった。海棠の木の下をよく散歩したらしい。</p>	<p>2011年度以来の漢詩単独での出題であった。漢詩に苦手意識をもつ受験生にとってはつらかっただろう。漢詩を読み解くポイントには以下の二つ。</p> <p>①まずは全体の意図を捉えること。</p> <p>漢詩を詠むのにもそれなりの理由があるはずである。一見論理性に欠けるようである詩にも、大局としての意志</p>

**傾向と対策**

がある。そして細部はすべてその意志へ向かっているはず。

②漢文的素養をフルに利用すること。

当時の読者の感覚では理解が容易である表現も、現代日本人である私たちにはなかなか理解しがたいことがある。今回で言えば、「左遷」「海棠」からそれぞれ「孤独」「美人」を連想することは難しいように思うかもしれない。だがこれらはある種パターン化している。知っていれば問題を解くのもずいぶん楽になるだろう。がんばって暗記するというよりも、頭の片隅に置いておくくらいの気持ちでよい。

(一) bは容易。dはこなれた訳出ができるとよい。「雪落紛紛」の解釈は難しいが、問題を解くうえで不必要であったため、こだわりすぎないように。(二)(三)は前述のポイント

①②を抑えられれば七割の解答が作れただろう。(三)は情報の適切な取捨選択とともに、決められた枠の中に必要な情報を詰め込む能力、すなわち言い換えに必要な語彙力が試された。

《この解説の使い方》

本文読解

「通読」からなる。「通読」は教科書や辞書が使えない状態を想定した、試験場での読み方である。一読で内容を把握できる人がどのように本文を読んでいるかをたどり、自分の読み方を見直そう。一読しておおよその意味がつかめる人の読み(◎)、ワ

ンランク上の読み(★)、脳内で把握された内容(◆)を適宜載せてある。

**設問解説**

設問ごとに、どのように解答を導くか詳細に解説した。また、関連知識も掲載している。

**本文解説**

「書き下し」「現代語訳」「要旨」からなる。本文を読むのに時間がかかってしまう人は、「書き下し」を音読して漢文独特のリズムに慣れるとよい。

なお、作者名・作品名(作品名を書き下す場合を除く)のふりがなは現代仮名遣い、それ以外のふりがなは歴史的仮名遣いを用いている。

**解答**

(一) b 特にすることがない

d どうして遠慮なく触れるだろうか、いやためらってしまう

(二) 霧で湿った海棠の花弁を、酒を飲んだ美人の赤い唇と上気した頬に喩えている。

(三) 遠い故郷から運ばれ一株だけで咲く海棠の姿を黄州に流された蘇軾自身に重ねて共感し、互いの孤独を慰めようとしているから。

**本文読解**

**通読**

◎うわあ、漢詩だ……。蘇軾が黄州に流されていた時期に作ったもの。わざわざこんなことを書いてくるってことは、答えに必要なのかも。

寓居定惠院の東、雑花山に満つ、海棠一株有り、土人は責きを知らず

◎長いタイトルだなあ。どうやら海棠を褒める歌っぽいな。それを念頭に読んでいこう。

★海棠か。蘇軾の作で「定惠院海棠詩」なんてのもあったな。

◆左遷先で雑多な花の中に海棠が一株あって、でも土地の人は海棠の尊さを知らない。

江城の地は瘴にして草木蕃し 只だ名花の苦だ幽独なる有り

◎「瘴」か……日本みたいな感じかな。「名花」は海棠だろう。題に「一株」ってあったし。「幽独」は「ひっそり」って感じだろう。

◆湿っぽくて草木の茂る中に、海棠がひっそりと咲いている。

嫣然として一笑す竹籬の間

◎主語は海棠かなあ。でも海棠は笑わないよな。花だし。

★海棠といえ、やっぱり楊貴妃だよなあ。美人があでやかにほほ笑むー美しいってことを表現しているんだろう。

◆海棠がにっこり笑う。美しい。

桃李山に漫つるも総て粗俗

◆桃やすももの花も俗っぽく見えるほど海棠は美しいなあ。

★桃李も漢詩の世界ではわりとよいイメージのある花んだけどなあ。

「桃李不言、下自成蹊(桃やすもものは何も言わないけれど、その美しさに人が自然と集まってくる)」って言葉もあるくらいだし。そんな桃李ですら、「粗俗!」と言い切るなんて、もう海棠爆褒めだなあ。

也<sup>ま</sup>た知る造物深意有るを 故<sup>こ</sup>に佳人をして空谷に在らしむ

◎造物⇨造物主は漢文で出てきたことがあったような。「佳人」は誰だ？ 海棠の喩えかもしれない。さつき「嫣然一笑」ってあったのも、海棠を美人に喩えて、その美人のほほ笑み⇨すごく美しい、っていうことだったんじゃないか！？

★やっぱり海棠⇨美人の喩えがきた。

◆神様が、わざと美人⇨海棠を何も無い谷に置いたのには深い意図がある。

◎どんな意図があるんだろう。

自然の富貴天姿より出づ

◎「富貴」っていったら普通金持ちで身分が高いつて感じだけど、ここではどうなんだろう。たぶん海棠の美しさのことだから、「高貴さ」ってことなのかなあ。そういえばさつき桃やすももを「粗俗」って言ってたし、その反対ってことかな。そんな海棠の高貴さは「天姿」…天にもらったありのままの姿、から出ている。

◆かざらない高貴な美しさはありのままの姿から出ている。

金盤もて華屋に薦むるを待たず

◎？ 何を言っているんだろう。金盤できらびやかな宮殿に薦める必要はない？ よくわかんないけど、たぶん自然のままの海棠がきれいだよってことなんだろう。飛ばそう。

◆とにかく海棠はきれいだなあ。

★二句前でも海棠を「佳人」に喩えているし、この次の句でも「朱唇」のように海棠を「佳人」として扱っている。だからこもそうなのかなあ。

それと、第6句の「故遣佳人在空谷」とこの第8句「不待金盤薦華屋」

で「空谷」と「華屋」は明らかに対になっている。「金」「華」など、「自然富貴」「天姿」とは対照的にきらびやかな感じだ。

朱唇酒を得て暈<sup>ほほ</sup>臉<sup>ほほ</sup>に生<sup>は</sup>ず 翠<sup>すい</sup>袖<sup>しゅう</sup>紗<sup>さ</sup>を巻<sup>ま</sup>きて紅<sup>こう</sup>肉<sup>にく</sup>に映<sup>え</sup>ず

◎あかい唇は酒を得て、暈が頬にできる。緑の袖は薄絹を巻いて赤が肉に映える……意味がわからない。海棠出てこないし……「朱」「赤」が気になるなあ。「注」の「海棠」の欄に、「春に濃淡のある紅色の花を咲かせる」ってあるし。これはつまり海棠の比喩だろう。傍線が引いてあって、「何をどのように表現したものか」とあるから、比喩を答えさせる問題なんだな。とりあえずめんどくさそうだからあとで考えよう。

★これも「海棠」⇨「佳人」シリーズの一環だろう。「朱唇皓齒(赤い唇、白い歯)」が美人の条件とも言われるし。

林深く霧暗くして暁光遅く 暖かく風軽くして春睡足る

◎春眠暁を覚えずって感じだな。主語は誰だろう？

★「春睡」かあ。玄宗が、ほろ酔いで眠たげな楊貴妃を見て「海棠の睡未だ足らず」と言った、という故事があったなあ。それを踏まえて、朝霧にける海棠の様子を描写したんだろうか。たぶん春眠をむさぼってる主語は美人(海棠)だろう。

雨中淚有り亦凄慘 月下人無く更に清淑

◎第13句と第14句がきれいな対句になっている。海棠の美しさをたたえているんだろう。「涙有り」はたぶん、雨に濡れている様子を喩えているんだろう。どんな状況でも、さまざま美しい姿を見せる海棠。

◆どんな状況でも海棠は美しいなあ。

★第11句〜第14句で、海棠のいろいろな美しさを描写している。

先生食飽きて。」事無し」 散歩逍遙して自ら腹を捫つ

◎飽きて、は古文単語「飽く」といっしよで満足するって意味かな。先生って誰だ？ 海棠ではないだろうし……。ほかにありえる登場人物は、作者くらいかなあ。

★第15句、ちょうど半分を過ぎたところか。場面転換かな？

◆蘇軾はお腹いっぱい、うろろろ散歩している。

人家と僧舎とを問はず 杖を拄き門を敲き修竹を看る

◎主語は「先生」のままだろう。杖をついてるってことはおじいちゃんのかな。「看」の字はただ見るだけじゃなく、手をかざしてしげしげと見ると感じ。散歩して竹を観察しているんだな。そういえばさっきも「竹籬」って出てきたなあ。

◆いろんな家の門をたたいて竹を見せてもらおう。

◎大丈夫か、近所迷惑じゃないのかなあ。

忽ち絶艶の衰朽を照らすに逢ひ 嘆息無言病目を揩ふ

◎「絶艶」と「衰朽」はそれぞれ何を表しているんだろう。「絶艶」は海棠っぽいな、褒めてるし。となると「衰朽」は「病目」をぬぐった主語だろう。さっき「杖を拄き」ってあったから、「先生」を指しているのかなあ。

◆海棠の美しさに照らされて、何も言えずため息をつく。

陋邦何れの処にか此の花を得たる 無乃好事の西蜀より移せるか

◎「陋」の字は「陋巷」「陋悪」「陋習」に使われるから、「陋邦」は「辺鄙な

土地」って感じかなあ。どこからこの花を得たのか？ 「好事」は「事を好む」人、つまり風流人。「注」より「西蜀」現在の四川省。海棠の原産地とされていた」とあるから、海棠の美しさを知る風流人が原産地から移した？ 「無乃」は初めて見たけど、「寧」といっしよだろう。

◆こんな土地にどうして海棠が咲いているのだろう。風流人が西蜀から移植したのだろうか。

★そういえば蘇軾も四川省の出身だったなあ。海棠のふるさとといっしよだ。

寸根千里致し易からず 子を銜みて飛来せるは定めし鴻鵠ならん

◎「寸」って長さの単位だけど、「寸暇」「寸前」みたいに「ごくわずか」の意味もあったな。「子」は「種子」だろう。

◆弱い根を長い距離もってくるのは大変だ。大きな渡り鳥が種をくわえてもってきたんだろう。

◎なんかすごいどうでもいい話してるなあ。

★第21句の疑問の答えがここにあるな。「21（疑問）↓22（答え）↑23（否定）」↓24（本当の答え）

天涯流落俱に念ふべし

◎「俱」は「それぞれがどちらも」の意味だったな。「天涯流落」はどういう意味だろう……。

★「天涯」は「空の果て」って意味だけど、「故郷を遠く離れた地」って意味もあったな。海棠も蘇軾も、故郷から遠く離れた地で一人さびしく生きてる。そんな互いの身をともし思おう、ってことだろう。いい話だ。

◆故郷から遠くを漂う互いの身をともし思おう。

為に「樽を飲み此の曲を歌ふ」

◎「飲一樽」は酒のことだろう。

明朝酒醒めて還た独り来らば 雪落ちて紛紛。那忍触るに忍びん

◎「還」は「めぐりめぐって・ふたたび」の意味。突然の「雪」？ 海棠が

咲くのは春なのに？ 季節はずれの雪なのかなあ。でも傍線部 d は(一)で聞かれてるだけだから、ちゃんと解釈しなくてもセーフだろう。

★海棠の散る様子を雪に例えているのかなあ。それともほんとうに雪が降っているのだろうか？ 「那忍触」だから、触れるのをためらう。①雪のようにはらはらと海棠が散っていて触れることすらためらう ②雪がはらはらと海棠に降り積もっており、その美しさに触れることすらためらうの二パターンの解釈がありそうだな。

設問解説

(一)

解答 b 特にすることがない

d どうして遠慮なく触れるだろうか、いやためらってしま

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 現代語訳

解説

b

「無一事」をそのまま訳すと「一事が無い」となる。「一事」とはなんだろうか。「こ」で「一」の漢字に引っ張られて「一つの事……なんだそれ？」と

なってしまうとよくない。字面だけにとらわれすぎず、視野を広くもって文脈を見てみよう。ポイント「先生食飽」↓。「無一事」↓「散歩逍遙自捫腹」という一連の流れである。

お腹がいっぱい+「無一事」↓うろろと散歩して腹をなでる

という状況と「無」の字から考えると、「一事」とは「すること」ではないかと推測できる。

なお、「一事」＝「心配事」という解答もあるように思うかもしれない。だが、蘇軾は当時左遷され、孤独で不安定な状況にあるため、「心配事がない」とは考えにくい。よって否定されるだろう。

d

反語である。「那」で「なんぢ」と読む。パターンはそう珍しくはない(細かく言えば、同じ音をもつ「何」の音を借りている)。たとえわからなくても、「忍」の送り仮名「ビ」を見ればなんとなく察しはつくはずだ。「未然形+ン(ヤ)」の形である。ちなみに、古語「忍ブ」はバ行上二段、バ行四段どちらにも活用する。

「那忍触」を直訳すれば「どうして触れるに忍ぶだろうか、いや触れるに忍びない」となる。「しのびない」というのは現代語でも耳にする。「耐えられない」という意味だ。お笑いコンビのトータルテンボスが、漫才の冒頭に「忍びねえな」「かまわんよ」と言うくだりがあるが、あれはたぶん「相手にかける迷惑を考えると耐えられないくらいだ」(申し訳ないな)「かまわんよ」ということだろう。

さて、先の直訳を解答としても間違っていない。「しするに忍びない」という言い方は現代語だからだ。だが、あまりうまくない。普段使わない言葉で現代語訳の解答として書くのでは、ちょっとさぼっているような印象を



与えかねない。そこで「どうして遠慮なく触れるだろうか、いやためらってしまう」と意識した。

ちなみに、これが詠嘆ではないか、と考えた人もいるかもしれない。漢詩の最後の句であるのだし、感動していそうなおいがする。よい勘だが、今回は明らかにまちがいである。

何<sub>レ</sub>V。

Vの送り仮名が連体形↓疑問 or 詠嘆

未然形十ン(ヤ)↓反語

という原則があるからである。文脈をたよりに問題を解く人は特に、こういった知識が抜け落ちないように気をつけたい。

【余談】

解答を書くためだけなら以上でよいのだが、ついでに「雪落紛紛」についても考えてみたい。二つの解釈を紹介しよう。

(1) 『雪』⇔『雪』説

翌朝再び一人で海棠を見に来たら、雪がはらはらと乱れ降っており、海棠の神聖な美しさに、触れることすらためらってしまう。

…春とはいえ寒い朝だったのでほんとうに雪が降っているという考え。前夜の宴ときれいな対比になっている。花に雪の降り積もる光景はなんとも美しいものだ。雪の冷たさにも耐えひとりで咲く海棠のいたましさ、健気さがあるいは蘇軾をはっとさせたのかもしれない。純粹に、美しさが心を打ったのかもしれない。

(2) 『雪』⇔『花びら』説

翌朝再び一人で海棠を見に来たら、花びらが雪のようにはらはらと乱れ落ちており、むやみに触れることもできない。

…花びらを雪に喩える、あるいは雪を花びらに喩えるというのは漢詩ではわ

りとよくとられる手法である。唐張説の「幽州親歳作」(正月を祝う詩)は「去歲荆南梅似雪／今年薊北雪如梅」(昨年は荆南で正月を迎え、梅が雪のように咲いていたが、今年は薊北で正月を迎え、雪が梅のように見える)と始まる。おしやれ。蘇軾自身が海棠を雪に喩えている例もある(「寒食雨(一)」)。昨晚酒を酌み交わした海棠が翌朝、はらはらと散っている。それを見た蘇軾はどんな思いを抱くだろう。仲間を失ったことを悲しむだろうか、それとも散る姿にまた美しさを見出すだろうか。

(二)

**解答** 霧で湿った海棠の花弁を、酒を飲んだ美人の赤い唇と上気した頬に喩えている。

難易度 ★★★★★

設問パターン 内容説明

**解説**

問いは、「何をどのように表現したものか」である。よって、解答は「〇を……表現したもの。」というようになる。

今回の漢文の出題の中で最も難易度の高い問いだった。これはいわゆる文法知識を超えた問題だ。詩的に読む、ということが必要である。それは決して豊かな感性をもって、ということではなく(もちろんあるに越したことはないが)「詩としての意図を理解して読む」ということである。

正解するのに必須のポイントは以下の三つ。

①傍線部 a は海棠の比喩であり、海棠の美しさを称えるためのものであるということ。

これが解答の根幹だ。これを理解して初めてスタート地点に立つことができる。

「唇」や「脣」をもつのは人である。そして第6句で蘇軾は海棠を「佳人」に喩えている。これらから、傍線部aは海棠の喩であることを見抜けるだろう。

比喩が用いられるのはどんなときか。それは、対象をより鮮やかに生き生きと描きたいとき、従来のものと異なる視点・発想から対象を描きたいときなどである。今回は、そもそも蘇軾はこの詩の中で海棠の美しさを称えている。そこから、傍線部の比喩には、海棠の美しさをより生き生きと描き出す意図がある、と推測することができる。

②「朱唇」は海棠の赤い花びらの喩であるということ。

これはなんとかなるだろう。「注」の「海棠」の欄をよく見てみよう。「海棠——バラ科の木。春に濃淡のある紅色の花を咲かせる。」とある。「紅色」に注目すれば、「朱唇」が海棠の赤い花びらを指している、と気づけるはずである。

③「暈生脣」は海棠の赤い花びらの喩であるということ。

これは少し難しい。そもそも「暈」の字の意味がわからない。漢字の意味がわからないときは、とりあえずその字を使った熟語を考えてみるというのは Teppan である。やってみよう。思い浮かんだとして「眩暈(めまい)」だろう。あるいは熟語ではないが、高く薄い雲がかかっているときに太陽を囲むようにできる虹の輪Ⅱ「かさ(暈)」を思い浮かべた人もあるかもしれない。だがそのどちらも今回はヒントにならなかった。

仕方ないのでこの方法はあきらめて、文意から漢字の意味を推測しよう。文中で「暈」は、酒に酔ったときに頬に生ずるもの、である。そこから推測するに、「暈」とは酔ったときの頬の赤みではないだろうか。そう考えてみると、赤み↓赤↓海棠の赤い花びら、と連想される。

以上三つのポイントのどれか一つでも欠けたら満点はとれないだろう。

また、「酒」に関しては以下のようにさまざまな解釈ができる。

(1)「酒」は「霧」の喩である。酒で湿る「朱唇」と酒で生じる「暈」は海棠が霧に濡れてその赤みを増す様子を表すものである。

(2)「酒」は比喩ではなく、「朱唇」「暈」を導くためのツールにすぎない。  
(3)「酒」とは比喩でなく、蘇軾が海棠の前で飲んでるものを指す。蘇軾がその酒を海棠にかけ、それによって濡れた海棠の花びらがますます鮮やかになったのを、酒を含んだ佳人の赤い唇と上気した頬に喩えている。

この点について正解を定めるのは難しい。とりあえず(1)を模範解答として取り上げた。黄州の霧深い気候を踏まえた面白い解釈である。詳細な理由は少々雑字チックになるので、後述の【余談】を読んでほしい。

(2)は可もなく不可もなくといった感じで、入試本番で書ける範囲のベスト(時間的にも、安全策をとりたいという精神的にも)であるかもしれない。  
(3)は少し想像過多の感もある。蘇軾が酒を海棠にかけた、という記述はない(センター試験の解説風に言っと)。だが「得酒」を文字通りそのまま受けとめると、このような解答に至ることも考えられるだろう。

#### 【余談】

「美人」の喩として「海棠」を用いることは、実は、ありきたりな手法である。例えば、四大奇書の一つ『水滸伝』には扈三娘こさんじょうという美貌の女将軍が登場し、彼女の美しさは「海棠の花」と評される。「海棠の睡ねむり未だ足らず」という故事成語があり、これは美人が酒に酔って頬を赤くし、眠たいかのようになまめかしい様子表すものである。ちなみに出典ではこの美人は楊貴妃を指す。派生して海棠の花言葉は「美人」「美人の眠り」である。もっとも、今回出題された詩中では反対に「美人」が「海棠」の喩になっただが。

それだけではない。「海棠」+「雨」というのも実は定番なのだ。美人の

うちしおれる様子を「海棠の雨に濡れたる風情」と言ったりもする。また「中海棠」を詠んだ詩は日本にも多く存在する。江戸時代の歌人橘曙覧は「海棠」という題で「くれなゐの唇いとどなまめきて雨にしめれる花のかほよさ」(『志濃夫廼舎歌集』)なんて詠んでいる。

この詩中では雨ではなく霧であるが、こんな背景を踏まえると、海棠を霧で湿らせてしまいたくならないだろうか。したがって、(1)を模範解答とする。

(三)

**解答** 遠い故郷から運ばれ一株だけで咲く海棠の姿を黄州に左遷された蘇

軾自身に重ねて共感し、互いの孤独を慰めようとしているから。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明

**解説**

問いは「なぜそうするのか」である。よって、解答の文末は「くから」となる。

傍線部の現代語訳は容易。「海棠の」ために一樽の酒を飲み此の曲(「寓居定惠院之東、雑花満山、有海棠一株、土人不知貴也」)を歌う。

さて、なぜ蘇軾は海棠のために酒を飲み、詩を歌ったのだろうか。第25句を見てみよう。「天涯流落俱可念」「天涯」から「天涯孤独」を連想するかもしれない。「天涯」とはもとは空の果てのこと、転じて遠い土地、特に故郷から遠く離れた地のことを表す。「俱」は「いっしょに」「どちらも」の意。つまり、「故郷から遠く離れた地をさまよう身を、いっしょに思おう」となる。

「天涯流落」の身であるのは誰だろうか。第21句〜第24句からわかるよう

に、故郷・西蜀から遠く離れた地で一株だけ咲く海棠だろう。そして、蘇軾自身も似た境遇にある。リード文を見てみよう。「次の詩は、北宋の蘇軾が朝廷を誹謗した罪で黄州に流されていた時期に作ったものである」とある。「天涯流落」の身である蘇軾が「天涯流落」である海棠に出会ったのである。だから「俱可念」なのである。

ここまでを読み取って、「海棠に蘇軾自身を重ねて共感したから」を解答とするのでは、あと一歩が足りないという感じがある。もう少し考えてみる必要がある。

「為飲一樽歌此曲」これによって蘇軾は何を得るのだろうか？ 共感の先にあるのは「共有」である。互いの不遇な身の上を共有している。共有することで生まれるのが、互いへの「慰め」である。そもそも蘇軾も海棠も孤独な身の上である。そんな二者にとって、自分に似た境遇のものと心を通わせることは、我々の体感するよりも大きな価値をもっていただろう。したがって、「海棠に蘇軾自身を重ねて共感し、互いの孤独を慰めようとしているから」のほうがより蘇軾の状況をよく反映しているだろう。あとはなぜ蘇軾が海棠に共感しているのかがわかるよう、互いの置かれている類似した状況をまとめればよいだろう。

**本文解説**

**題** (「寓居定惠院之東」く「土人不知貴也」)

**書き下し**

寓居定惠院の東、雑花山に満つ、海棠一株有り、土人は貴きを知らざるなり

**現代語訳**

つかの間の住まいである定惠院の東では、さまざまな花が山に咲きこぼれている。(その中に) 海棠が一株あるのだが、土地の者は(その) 気品に満ちた美しさを知らない。

第1部 海棠の高貴であてやかな美しさ (第1句〜第14句)

書き下し

江城地は瘴にして草木蕃し 只だ名花の苦だ幽独なる有り  
 嫣然として一笑す竹籬の間 桃李山に漫つるも総て粗俗  
 也た知る造物深意有るを 故に佳人をして空谷に在らしむ  
 自然の富貴天姿より出づ 金盤もて華屋に薦むるを待たず  
 朱唇酒を得て暈臉に生ず 翠袖紗を巻きて紅肉に映す  
 林深く霧暗くして曙光遅く 日暖かく風軽くして春睡足る  
 雨中涙有り亦た悽慘 月下人無く更に清淑

現代語訳

長江に面したここ黄州の地は湿気が多く、草木が生い茂っている。  
 (その中に、美しい花として) 名高い海棠が、たった一株だけひそかに咲いている。

籬(Ⅱ垣根)のように密集した竹「竹で編まれた籬(Ⅱ垣根)」の間から、  
 につこりとあてやかにほほ笑む。

山には桃やすももの花が満ちているが、(美しい海棠に比べたら) どれも洗練されておらず、気品に欠ける。

私は知った、造物主の深い意図を。

わざとこの美しい人(Ⅱ海棠、以下同)を人氣のないさびしい谷に住まわせているのだ。

彼女の飾らない高貴さは生まれながらのものである。

(そのままの姿でもう十分に高貴さを備えているのだから) わざわざ豪華な食事を与えてきらびやかな宮殿に住まわせる必要はない。

朱い唇は酒に湿り、頬には赤みがさす。  
 翠色の袖に薄絹をまとい、肌にも赤みが浮かび上がる。

林は深く霧で暗いので朝日が射し込むのは遅い。

日の光は暖かく、風は軽く爽快なので、彼女は心ゆくまで春眠をむさぼる。  
 雨の中涙を流す姿もまた、いたましくも美しい。

月の光の下、人氣もなく、いつそう清らかでしとやかだ。

第2部 蘇軾と海棠 (第15句〜)

書き下し

先生食飽きて一事無し 散步逍遥して自ら腹を捫つ  
 人家と僧舎とを問はず 杖を拄き門を敲き修竹を看る  
 忽ち絶艶の衰朽を照らすに逢ひ 嘆息無言病目を描ふ  
 陋邦何れの処にか此の花を得たる 無乃好事の西蜀より移せるか  
 寸根千里致し易からず 子を銜みて飛来せるは定めし鴻鵠ならん  
 天涯流落俱に念ふべし 為に一樽を飲み此の曲を歌ふ  
 明朝酒醒めて還た独り来らば 雪落ちて紛紛那ぞ触るるに忍びん

現代語訳

私は腹いっぱいですることもなく、  
 あてもなく散歩して腹をなでる。

民家であるか僧房であるかはさておき、

杖をつきながら門を叩き、手をかざして長く伸びた竹を見る。  
 いきなり、この上なくあてやかなで美しい海棠が老いさらばえた私を照らし出し、

私は（感激のあまり）ため息をついてもとも言えず、病でかすんだ目をこす  
る。

この辺鄙な土地はいつたどこからこの花を手に入れたのだろうか。

あるいは、好事家が西蜀から移植したのだろうか。

（いや、）短く弱々しい根（しか持たない海棠）を千里もの距離を越えて運ん  
でくるのは容易ではない。

種をくわえて（黄州まで）飛んで来たのはおそらく大きな渡り鳥であろう。

故郷を遠く離れ流浪する身の上に、互いに思いをはせよう。

（私と同じ境遇にある海棠の）ために一樽の酒を飲み、この詩を歌う。

明日の朝酔いが覚めてから再び一人で来てみれば、

（きつと海棠の花弁が）雪のようにはらはらと散っていて、どうして遠慮な  
く触れることができようか、いやためらってしまっただろう「雪がはらはらと  
乱れ降っており、どうして海棠の花に触れることができようか、いやためら  
ってしまう」。

### 要旨

黄州に流された蘇軾は、山中に咲く一株の美しい海棠を見つめる。蘇軾は、  
遠い故郷から運ばれてきたらしい海棠を流滴の身である自身に重ね合わせ  
て共感し、互いを慰めようと酒を飲みうたうのであった。（93字）

### 【参考】左遷について／酒について

### 左遷について

左遷中は、なぜかよい詩が生まれる。自然が豊かで見るものも  
新しく、何より時間がたっぷりあるからだろう。蘇軾も左遷され  
ている間にたくさんのお名詩を残した。

地位も名誉もなくし、国政にかかわることもできず、ただ赦さ  
れるのを待つだけ。だが、不思議と「左遷されてつらいよう寂し  
いよう」と明言した詩はあまりないように思う。

例えば、柳宗元の「江雪」も左遷中の作である。「千山鳥飛  
絶へ／万径人蹤滅す／孤舟蓑笠の翁／独り釣る寒江の雪」  
（鳥も飛ばない。人の足跡も消えた。一艘の舟、蓑と笠をかむつ  
た老人が、たった一人釣りをしている。雪の降る寒い河で）。明言  
されてはいないが、これを彼の心象風景と読むならば、その心中  
は察するに余りある。王昌齡の「芙蓉楼送辛漸」も似た。パター  
ンである。こちらは結句の「一片の氷心玉壺に在り」（故郷  
の友人が私の様子を尋ねたら答えてくれ）ひとかけらの氷が玉壺  
に浮かぶように、清らかな心のままだ」というのがなんとも印象  
的。

それから、意外なことに、左遷先を楽しむような詩もある。蘇  
軾の「初到黄州」には「長江郭を繞りて魚の美なるを知り／  
好竹山に連なりて筍の香しきを覚ゆ」（長江が城郭のぐるり  
を流れていて魚のうまさを知る。素晴らしい竹が山に連なってい  
て筍のこうばしさを知る）とある。まあ、蘇軾の詩には楽観的な  
ものが多い。ところで、この詩の尾聯は、「只だ暫す 糸毫の事  
をも補ふ無く／尚ほ官家の庄酒囊を費やすを」（ただ恥ずか  
しいのは、国の役にはほんの少しも立っていないのに、政府から  
の支給物があることだ）となっている。これを、自分を左遷した



政府への皮肉ととることもできる。「いやあすみません、こんな素晴らしいところで給料泥棒して。でもこれはみんな、政府が私にさせていることなんですよ」という感じだろうか。

## 酒について

酒は、漢詩における重要なツールである。楽しみだったり、悲しみだったり「酒」の一字に込められるから不思議だ。

特に別れの場面では非常に高い頻度で登場する。干武陵の「勸酒」なんかそうだ。「君に勸む金屈卮／満酌辞するを須ひず／花発きて風雨多し／人生別離足る」(コノサカズキヲ受ケテクレ／ドウゾナミナミツガシテオクレ／花ニアラシノタトヘモアルゾ／「サヨナラ」ダケガ人生ダ … 井伏鱒二『厄除け詩集』)。井伏の現代語訳のほうが有名だろうか。

それから、酒を飲まずにはいられないほどのつらさというのもある。王翰「涼州詞」の「葡萄の美酒夜光の杯／飲まんと欲すれば琵琶馬上に催す／酔ひて沙場に臥すも君笑ふこと莫かれ／古来征战幾人か回る」(葡萄酒、月にきらきら光る杯。馬の上で誰かが琵琶を弾く。酔いつぶれて砂漠に倒れ伏しても、君、どうか笑わないでくれ。昔から戦に出ていったい何人が無事に帰ってきたというんだ)もよい。起句・承句の異国情緒あふれる宴会の様子から一転、結句にはっとさせられる。

最後に楽しいお酒の詩を。李白「月下独酌」は、自分と月と影との三人で宴を催すというユニークな詩だ。「我歌へば月徘徊し／我舞へば影零乱す」(私が歌えば月は浮かれ、私が舞えば影もゆらぐ)。なんとも楽しそうである。だが飲みすぎもよくない。

蘇軾が詩「金山寺与柳子玉飲、大醉、臥宝覺禪榻、夜分方醒、書其壁」で言うことには、「悪酒は悪人の如し／相ひ攻むること刀箭より劇し」(悪酒は悪人のようなものだ。刀や弓矢よりも激しく攻撃してくる)なのだから。

(津田智沙、関信成、若杉柗志)